

## 皮錫瑞『経学歴史』について

関 口 順\*

### はじめに

『経学歴史』とは、皮錫瑞(1850-1908)によって20世紀の初頭に書かれた経学の通史である<sup>(1)</sup>。通史を書くという仕事は自己規定を伴うので、対象を意味づけるだけの条件が備わったときに可能になる。『経学歴史』の場合、その条件の最も大なるものとして、西洋文明との邂逅、具体的には「西学」の移入による経学の相対化を指摘できる。皮氏自身「新学出でてより、旧学を薄視し、遂に焼経の説あり」と述べ、著作動機となった危機意識の一端を明らかにしている〔第十章経学復盛時代〕。また、皮氏は清末の今文学派に属するという自己意識を有しているので、その自覚の下に、自己の立ち位置を「経書の学問の最先端に位置する」と見なし、経学の歴史を叙述したのである。

『経学歴史』の叙述を特徴づけている清末今文学派の経学観については、既に研究史紹介の文章中で触れたことがある<sup>(2)</sup>。今回はそれとの重複をなるべく避け、『経学歴史』全体の特徴について、それを現在時点においても価値のある点と閲読上注意すべき問題点とに分けて整理して述べる。

### 価値ある点について

価値ある点の第一は、なんとと言っても、経学の営み自体としてはその最終段階にあって、かつ西学を意識して書かれた最初の経学通史とい

う点であろう。これを読めば、現在の我々でも一応の流れを通観できる。

皮氏は清末今文学派という特異な傾向の学術流派に身を置いていたため、乾隆・嘉慶時代に最盛期を迎えた「漢学」を一時代前の学風として捉え、自己の立場から首尾を一貫させた主張性のある経学通史を叙述できたのだと考えられる。「漢学」とは、漢代〔実際には後漢を対象にしている〕の学問を尊びそれを継ぐことを標榜する、音韻訓詁の研究〔小学〕を基盤とした文献学的学問をいう呼び方であり、実証性を重んずることを特色とする。少しニュアンスは異なるが、「樸学」「考拠学〔考証学〕」とも呼ばれる。江藩の『国朝漢学師承記』<sup>(3)</sup>は、その「漢学」の学術史である。皮氏にとって、『国朝漢学師承記』は先行する優れた学術〔漢学〕を叙述した書であるとともに、また乗り越えるべき学問〔漢学〕を示すものであった。皮氏は今文学の立場に立った経学通史を作るという構想で、それを乗り越えようとしたのである。

さきほど「首尾を一貫させた主張性のある経学史」と述べた。「尾」の方は彼等今文派の経学活動だから、もともとハッキリしている。「首」のほうも「孔子が経書を作った」という清末今文学派独自の見解にもとづいているので、経書の起源自体は「孔子が刪定してから」と明瞭になる。しかし、すでにポスト「漢学」の時代なので、「孔子が経書を作った」とする見解の根拠を大方の納得のいくように示さねばならず、それらの主張を支える説明には苦しむことになった。第一章経学開闢時代を見ると、相当苦しい論理を展開している。

\* せきぐち・じゅん

埼玉大学教養学部教授、中国思想史

『国朝漢学師承記』の著述意図は清代「漢学」の顕彰と叙述であったが、その序には「漢学」に至るまでの簡単な経学史の概観も述べられている。そこでは、もちろん三代の制、とくに学校の制度が強調されており、詩・書などの経もその頃からすでに存在したとされている。このような簡単な経学史は劉歆の「移太常博士書」に始まって、『漢書』儒林伝の序の部分がそれを受け継いでおり、前例のあるものである。さらに、各正史の儒林伝・芸文志・経籍志などにも、或いは簡史風に、或いは当該の朝代を対象として詳細に、述べられている。皮氏の『経学歴史』は、こういった述作の延長上に企画されており、事実、それらの述作を材料として多用している。

つまり、今や西学に脅かされつつある中華の文明を見据え、その脊梁たる経学を再確立し顕彰しようとする意図の下に、『国朝漢学師承記』序やその他書籍の序などの簡史的述作を下敷きにそれを発展させ、経学活動の一環として今文学派の立場性を明確にし、経書研究の流れを叙述した、と評しうる。

価値ある点の第二は、単なる断代史的叙述を積み重ねたのではなく、「第五章経学中衰時代」のように経学の立場から時代の特徴を捉え、歴史の変遷を追っていることである。これは新鮮である。朝代の推移が認識の基礎となるのは已むを得ないが、経学活動の流れそのものを内容的に考察し、不十分なながらもその変化の原因を分析しており、全体が一巻と短いことも手伝って、列伝風・学案風の学術史スタイルを免れている。かつ、清末今文学派という立場性は保ちながらもさすが二十世紀初頭の著作なので、出来るだけ論理性を保とうとする努力はある程度感じられ、ある種の近代性をもっている。

価値ある点の第三は、上述の事情からして当然予想されることながら、原材料の引用が多いことである。上記の述作類の外、顧炎武『日知

録』や王応麟『困学紀聞』など優れた筭記類をも使用している。これは、皮氏が意図してそうした訳ではないが、原資料をして語らせるという今日的手法に通じ、これから専門的に研究する或いは経学史の基本的な常識を学ぶ人にとって有益に働くだらう。

## 問題点について

はじめに、周予同が看過できなかった「デタラメ〔荒謬〕」三点を紹介しておく。これは周氏が注釈本『経学歴史』<sup>(4)</sup>に附した序言の中の「四：皮著経学歴史略評」において批判している事項である。①孔子の教えで国を救うの説。孔子の学説・思想が歴史的眞実としてどのようなものだったか未だ不明なのに、現実の政治にやみくもに應用しようとするのは、危険である。②六経を現実政治に直接應用するの説。皮氏が挙げて賛嘆している「漢の平当という人が、『禹貢』に詳しいという理由で黄河の治水を命じられた」などの事例はバカバカしいもので、六経を政治に直接應用することを目指すのは「愚に非ざれば誣」の類である。③讖緯は証拠になるの説。清末の今文学者〔具体的には夏曾佑を指しているようだ〕は、素王と見なした孔子の特別性を示す証拠を求めその典拠となる讖緯を信じた。また自らの源とする西漢の経師説を擁護するために讖緯を容認した。これらが、彼等が讖緯を信用した原因である。皮氏も御多分に漏れず、「災異には徴驗がある」とか「神道設教の趣旨を見るべきであり、漢儒が讖緯を引くのを批判してはいけない」などと言っているが、デタラメとしなければいけない。

周予同が自ら語るによれば、これら三点は皮錫瑞がこの本を書いた当時ならまだ許せたが、注釈本として新たに出版する今の時点では、この本の出版によってデタラメを垂れ流す訳には

いかず、批判を加えざるを得ない、のである。しかし、現在の我々から見れば、すでに周氏の注釈本が出版された1929年当時から八十年も経っており、また民国初年のような今文派と古文派の深刻な闘争が存在する訳でもないので、誰でも容易に認識できる、いわば言わずもがなの事柄のように見える。

以下は、現在の時点で見過ごせない問題点を検討していきたい。

### 1. 先王の事績が語られていないこと

上述のように、皮氏の『経学歴史』は清末今文学派の立場性にもとづき経学活動の一環として叙述されている。だから、経書の起源は「孔子が刪定してから」とする見解も、それなりに尊重されて然るべきだろう。また、うっかりすると、「孔子は儒教の祖だ」式の今日の常識に適うと見なされるかもしれない。

しかし、経学活動から脱けだした純粹な学術的立場に立てば、その見解をそのまま放置することは出来ない。堯・舜・禹・湯・文・武・周公など聖人の存在と唐虞三代という道の行われた時代とは、伝統的知識人にとって当然の常識であり、経学成立の大前提の一つであった。ゆえに、この唐虞三代の先王の事績は、経学の在りし日の姿を実際に即し如実に考察するうえで非常に重要な要因であり、軽々に皮氏の構想に従うわけにはいかないのである。

本来、皮氏のこの問題点は丁寧に検討されるべきなのだが、その検討は、拙著『儒学のかたち』[東大出版会]において、大きな全体的連関の中で既に行っている。議論はそちらでなされているので、就いて読んでいただきたい。また『経学歴史』以後、経学史を編む人々が先王の事績の問題にどう対処して来たかという経緯についても、すでに注(2)に挙げた文章で論じている。それも、ここでは省略する。

ただ、周予同がこの問題にどう対処していたかについては、一言しておきたい。この問題については、上述の序言の中で何も触れていない。ただ、「やや慎重に言うなら、中国の経学を遡るのは西漢初年までだ」と、極めて慎重に語るだけである。注釈本を出した当時の周予同は、この問題を取り上げることが出来なかった。なぜなら、すでに堯・舜など聖王の歴史的事実への確信は揺らいでおり、一方、觀念の事実を思想的に尊重する学风はまだ成立していなかったからである。歴史的事実としての孔子が果たしてどのような活動をしたのか、どういう思想を持っていたのか——について慎重に判断しようとする周予同は、孔子から経学の歴史を開始する皮氏のやり方にも不安はあったろうが、下手に自己の意見を突出させると収拾がつかなくなる虞れがあったろう<sup>(5)</sup>。

### 2. 清代「漢学」の影響下にあること

いわゆる清朝考証学〔漢学〕の影響は大きかった。皮錫瑞は学問のための学問の性格の濃い「漢学」を乗り越え、もっと現実政治に役立つ「致用」の学問を確立することを目指しており、西漢の学術をそれに応じ得る性格のものと考えていた。そのような皮氏でも、考証学の偉大な影響力からは免れることができなかった。西漢の学術を継承すると標榜しても、結局、彼の学問は『尚書大伝疏証』や『今文尚書考証』のような文献研究であり、手法において違いはない。

検討を『経学歴史』に限ると、この問題点の顕著な現れとして、ほとんど文献研究の活動を叙述の対象にしていることが指摘できる。こう言うと、「経学とは文献学なのだから当たり前だ」と思われるかも知れない。しかし、皮氏にしても漢代官僚の登用や唐以降の科挙制度との関わりなどは論及しているので、経学の社会的(政治的)機能について理解していなかった訳

ではない。ただ、やはり従来の伝統的認識を集約した「漢学」の埒内であって、精神的に拘束されている。つまり、経学が文献学だとしても、経学史研究が文献学史研究で「能事畢れり」とは言えない、という点を指摘しておきたい。

社会的機能への十分な目配りを清末の皮錫瑞に要求するのは少し酷に過ぎるから、論点を絞って経学内部での漢学偏向を検出してみよう。それは宋学の評価に認めることが出来る。宋代の慶暦年間(1041~1048)以後は、その特徴を捉えて「第八章経学変古時代」という章題の下に叙述されている。「変古」とは「経文の文字を変える、文の順序を変える、古来の注解による解釈を恣意的に変える、ある部分を勝手に削除する、経伝の内容に疑問を呈する」などの学問傾向に着目して表現した言葉である。詳しくは、皮錫瑞の原文と周予同の懇切な注を見ていただきたいが、極めて批判的な叙述に終始していることは感じ取れよう。義理の学に即してもっとその美点を見出だそうとすれば、それも可能だったろうに。要するに、れっきとした「漢学」の立場である。

そもそも経学とは、『文心雕龍』に「三極〔天地人〕の彝訓、その書を經と言う〔宗經〕」とあるように、経書を通して天地の道理たる聖人の道を闡明する営みである。いかに理や心性の探求に傾こうと、宋明の学者は経書を無視したり棄てたりするつもりはないし、また出来なかった。門戸の見を張ることに批判的な皮錫瑞なら、そのような宋明の学者の努力をもっと正当に評価し、顕彰すべきだった。

心真如に由来する仏教の唯心論哲学の深奥な玄理に対抗し、一理を措定して心性の涵養を図る宋明の学者たちの哲学も、結局は「窮理盡性以て命に至る」(易)「人心は惟れ危うく、道心は惟れ微かなり、惟れ精、惟れ一」(書)「物有れば則有り」(詩)「天理を滅して人欲を窮む」(礼

記)など経書の文言の解釈に根拠を求めた、つまり聖人の道から演繹された道理だったのである。四書もそれら経書の延長上に位置づけられ、それら道理をさらに単刀直入に示す、六経への階梯の役割りを与えられていた。朱熹の「大学章句序」を見ると、その位置づけが如実に分かる。

皮氏も、もともと六経の周辺にすぎない『爾雅』を研究した郝懿行『爾雅義疏』を称揚するくらいなら〔第十章経学復盛時代〕、朱熹『四書章句集注』を正面から取り上げても良かったのではないか。『大学』中の「格物」を「物〔理〕にいたる」と訓ずるか、「物〔心の指向〕をただす」と訓ずるかで、鎬を削っていた学者たちにもっと好意的でも良かったのではないか。「宋儒の経説、古義に合わずと雖も、宋儒の学行実に古人に愧じず」〔第十章経学復盛時代〕とまで言うのなら、もう少し彼等の苦心を酌み、彼等の経学活動を正面から正当に評価しても良かったのではないか。

### 3. 今文・古文の対立という図式に従って叙述していること

これまで「清末今文派」という言葉を使ってきたが、「今文家」「今学」「今文学」「今文学派」などの言葉は、実のところ新しいものである。これと対応した意味で使われる限り、「古文家」「古学」「古文学」「古文学派」もまた新しい。

狩野直喜の『中国哲学史』<sup>(6)</sup>は、清代の学術を述べた部分〔第六篇「清の学術と思想」〕が今でも有益である。だが、その第三章の題は「乾嘉時代の漢学」であり、次の第四章は「道光以後の学術と思想」となっていて、狩野は、道光以後の学術と思想を特徴付けているのは公羊学だとし、「……之を要するに、乾嘉の人は東漢の経学を主としたるに対し、道光以後は西漢の経学を主としたのである。換言すれば、乾嘉の人は

概ね古文家（即ち孔壁より発見され又は河間の献王により得られたと称する古文を伝へたる学者）の説を奉じたのであり、之に対し道光以後の人は、今文家（即ち西漢のとき、従来口伝によりしものを当時の文字即ち漢隸を以て写したるテキストを伝へし学者）の説を主張したのである。」610頁と述べている。要するに、乾嘉の学術の特徴は「東漢の経学」「古文家の説」を主とするに在り、道光以後の学術の特徴は「西漢の経学」「今文家の説」を主とするに在る、と言っている。また、「公羊学派」と「今文学派」をほぼ同じ意味の言葉として使っている。これらの点は些か問題無しとしない。

「古文学」とは、通常は上引の狩野直喜の文章に見る如く、乾嘉の学術つまり「漢学」が信拠した学問、つまり東漢の学術、つまり許鄭の学とされることが多い<sup>(7)</sup>。このような認識はいつ頃から生じたのか。江藩の『国朝漢学師承記』には「今文学」「古文学」ということばは出てこない。劉逢禄（1776-1829）も、「今文」「古文」を、まだ学術特色を示す語としても学問の時代的特色を示す語としても使っていないようである。ところが、魏源（1794-1857）の「劉礼部遺書序」（道光10年1930年）になると、明確に乾嘉の学術を「致用」の観点から批判し、東漢許鄭の学を標的にして西漢十四博士の今文学を復すべきものとしている<sup>(8)</sup>。この辺りで公羊学を主としながらも更にそれを一般化し新たな学問体系として理念化した「今文学」の概念が出現した、と見る事が出来るのかもしれない。もっとも、「今文学派」といっても一様ではない。たとえば、魏源や龔自珍は伝統的立場なので先王の事績を認めており、孔子を「述べて作らず」の人と見ており、皮錫瑞や康有為の認識とは異なる。通常なら、春秋公羊学を除けば他に実体のない「今文学」という概念は定立するのが難しいところだが、対抗概念として乾嘉の学の大

宗「古文学」を設定したために、それが可能になったと思われる。また、要請された概念であるためか、鄭玄の捉え方〔古文学者あるいは今古文折衷の大成者〕の揺れに現れているように、「古文学」の方も実体とするところは至極曖昧である。

では、果たして、漢代において、このような「古文学」「今文学」なる実体はあったのか。たしかに、漢代においても、「今文〔通行の文字〕を以て読む」のような普通の言い方なら存在した。さらに、文字の意味での「古文」なら『史記』『漢書』に頻出するし、「古学」という語も漢の当時からあった。王国維は「漢書所謂古文説」において「地理志では古文尚書家説について、単に『古文』とだけ言っている」と述べ、「諸経に『古』の字を冠するのは家法をハッキリさせるためであって文字だけを言うのではない」と述べ、地理志の場合「古文」とは「学派」を言うのだと念を押している<sup>(9)</sup>。しかし、それらの「古文」つまり「学派」も、王璜・桑欽・杜林など特定の古文尚書家の説であり、古文学派一般ではない。やはり、古文学派と古文尚書家とは次元の違う概念として区別した方が良いのではないか。

後漢において、例えば、左伝学者と公羊学者が学官の坐をめぐる争ったのは事実であるが、別に古文学説一般と今文学説一般が争っていたのではない。五経の同異を議した白虎觀會議の議論の実態はよく分からないが、『五経異義』を見ると当時の「異義」についての取り扱い態度がある程度わかる。皮錫瑞『駁五経異義疏証』を使って調べてみる。許慎の「異義」は、今易京説、今文尚書欧陽説、詩魯説、古尚書説、今韓詩説、古詩毛説、今春秋公羊説、古周礼説、易孟京説、今孝経説、古左氏説など、様々な経説を挙げている。もっとも『駁五経異義疏証』は輯佚書なので、原拠とした元の本が引用の際に表現を変えている可能性もあり、大体の感覚

がつかめれば良しとしよう。許慎は大体的場合において、古左氏説など古文の經典にもとづく經説を是として、今公羊説など今文の經典の經説を非としているが、必ずしも古学の立場に立って今学を批判しているわけではない。いわば是々非々の態度であり、公羊説などを支持している場合も六条以上はある。それを駁する鄭玄説も、許説を支持すると見られるケースと許慎の断案に駁議を加えているケースに分かれる。これも亦、是々非々の立場と言える。

つまり、『左氏伝』『公羊伝』『周礼』などの經説は、他の經説と同じくそれぞれが完結的に存在し、時として相互に対立することはあっても、古学の經説体系とか今学の經説体系とかは存在していなかったと考えられる<sup>(10)</sup>。古文尚書とか魯詩とか、個々の經書学ごとに經説が産出され、「通」を重んじる後漢の学者が議論を重ね、白虎觀會議もその大規模な事例であり、鄭玄の「大成」もその帰結と見るのが順当なのではないか。

道光以来の学者の一部は、そのような後漢の状況を基に「今学」と「古学」という枠組を作り、その状況から今学と古学の対立・闘争を読み出した。乾嘉の學術を批判し、「漢学」の權威から独立した一派の旗を掲げるためには、「漢学」に強襲をかけて「今学」を析出し、許慎や鄭玄に代表される「漢学」を「古学」と見立て、乗り越えなくてはならないのだ。そうすることによって、彼ら一部の学者は「今文学派」を名乗る根拠ができるし、またそう名乗ることによって、今度は今学と古学の対立・闘争という歴史解釈が事実化される。こうして見ると、今文学派は「復活」したのでも、「復興」したのでも、「継承」したのでもない。一定の時代条件の下で見出だされ、新しく立てられたのだ。今文学派の学者にもいろいろいるが、概して言えば、そう言える。

今文学者皮氏の『經学歴史』は、当然のことながら、「今文学と古文学の対立」の図式に従って叙述されている。対立の図式といっても、朝代と結びつけているのは「前漢今文学」の方だけで、後漢については慎重に「後漢古文学」の類の言葉を避けている。後漢は今文学と古文学の併存の時代と捉え、鄭玄は「今古を雜糅した」「漢学」の大成者だとしているからである。だが、それらの叙述を注意深く読めば、「今文家」「今文学」「今文学派」などの言葉は、すべて皮氏の叙述の言葉〔つまり歴史解釈〕であり、引用されている原資料には一言半句も見当たらないことに気づくだろう。

堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・曾子・子思・孟子・周濂溪・・・朱熹と連なる道統が歴史事実としてでなく朱子学の一環としてのみ意味を持つように、兩漢における今古文の対立という捉え方も歴史事実というより清末今文学の一環としてのみ意味を持つ。そして、その捉え方は、清末今文学派に反対する一部の学者たちをも巻き込んでいる。彼ら伝統的学者の一部は、今文学派の唱える今文・古文の図式そのものを突いて崩す方向に行かず<sup>(11)</sup>、歴史觀・政治思想の相違を以て「今文学派」を批判することにより、もともと曖昧な「古文学派」を、反今文学の立場であるが故に引き受けさせられた。その結果が清末民初期の今文・古文の厳しい政治思想・學術上の抗争である。

その後、清末民初の今古文兩派は過去の存在となり、その影響力も次第に薄れ現在にはほとんど跡を絶っている。それなのに、兩漢における今文学・古文学の対立という図式が清末民初の今文学派の學術思想内に還元されず歴史的事実として定着し、清末以降に書かれた内外の思想史・哲学史叙述を支配している。この点には、もっと注意を払わなくてははいけない。

以上三つの問題点は、この『経学歴史』に見出される問題点のうち、いわば皮錫瑞に固有する特殊なものである。他の、一般的な広がりをもち経学の特質や在り方そのものに関わると思われる問題点〔たとえば、皮氏は「経学は旧を守るを専らにす（第四章経学極盛時代）」の立場から叙述しているが、それで良いのかどうか、等〕は、本書を閲読した人が自ら考えていただくよう希望する。

#### 附：周予同の注釈本について

付録として、周予同、および彼が注釈した『経学歴史』について、簡単にコメントしておこう。

周予同は1898年生まれ、浙江省瑞安の人である。1921年に北京高等師範学校国文部を卒業後、厦門大学教員、商務印書館編訳所編輯、温州十中教員、安徽大学教授、暨南大学教授、開明書店編輯兼副社長、復旦大学教授などを経て、1949年からは復旦大学歴史系教授や上海社会科学院歴史研究所副所長などを務めた。その頃の助手に、湯志鈞と朱維錚がいる。また、全国人民代表大會代表、上海市政治協商會議委員、上海史学会副会長、中国史学会理事なども務めている。1981年に死去、享年83歳。

周氏の経学史研究方面の業績を朱維錚が可能な限り集めて編集したのが『周予同経学史論著選集』（本文全875頁）である。これは1983年に、上海人民出版社から出版された。その後、1996年に『中国経学史講義』（約115頁）を追加した「増訂版」が出版されている。編集の経緯や増訂版出版の事情については、「編者説明」「増訂版前言」に詳しい。周氏の経学史研究業績には、その他、すでに注の（3）で紹介した『漢学師承記』選注、および本『経学歴史』の注釈がある。また、1930年代には、教育方面の『中国学校制度』『中国現代教育史』

や共編の教科書類を出版している<sup>(12)</sup>。

『経学歴史』は、原刊本が1906年に出版された後、1917年6月京都叢文堂より小島祐馬による返り点つきで出版されたもの〔全122頁〕、1923年以来幾度か商務印書館より原刊本の影印で出版されたもの〔全66葉。人人文庫版も同じ〕、また1930年上海の掃葉山房より石印で出版されたもの〔2冊。封面には「経学歴史通論」とあるが、原刊本と同じ本〕、1964年に台北の文海出版社より原刊本影印〔影印本を影印した可能性もある〕で出版されたもの〔全66葉〕、が出ている。

周予同が注釈を施した『経学歴史』が学生国学叢書の一つとして最初に商務印書館から出版された年月は、一応1929年3月と見ておく<sup>(13)</sup>。

「一応」というのは、「民国17年（1928年）11月初版、民国20年10月再版、民国23年4月国難後第1版」という奥付の本がたくさん見かけられるからである。また注（13）の④中華書局本の「重印後記」でも周予同自ら「1928年」と書いているからである。しかし、初版本発行以後その間違いを正すために作った「訂正及補遺」の日付は「18.6.30」であり、「訂正及補遺」の附された本はその日付以後の出版と考えざるを得ない。たくさん見かけられる民国17年初版の後裔を称する本には管見の限り「訂正及補遺」15頁が付いている。この不審点は、民国17年から民国23年までに刷られた『経学歴史』を精査出来れば解決することなので厳密には「待考」とすべきであろうが、今のところ手が回らない。とりあえず確認の出来た本を基準に「一応」の見通しを示しておいた次第である。

1929年10月には、その「訂正及補遺」を附した上で同じ商務印書館の万有文庫（第一集一千種）の中に組み込まれた<sup>(14)</sup>。

1959年には、「訂正及補遺」に従って実際

に訂正を施し、新たに附録一「皮鹿門先生伝略」「皮鹿門先生著述総目」附録二「本書引用清代人名出处表」を附載したうえで、北京中華書局から改めて活字を組んで出版された。その後、この版のリプリント本が香港中華書局から1961年に出版され、台湾の藝文印書館から1966年に出版されている。香港版は「重印後記」が省かれているだけであるが、藝文印書館版は「増注」と銘打つだけで注釈者周予同の名が出てこないし、本文と附録一「皮鹿門先生伝略」「皮鹿門先生著述総目」だけの影印である。また、1974年になると、同じ台湾藝文印書館から先の1966年リプリント本をその内容のままに新たな版に組み直した本が出版されている。手に入れやすく活字が大きくなった〔その分頁数が増えている〕のは有難いが、新たな誤植が増えているのは困りものである。それに、この版にも周予同の名が出てこない。2004年には、中華書局から、1959年版を内容は全くそのままに簡体字横組みに直した本が出ている。この本は少し誤字の訂正がある。

周氏の注釈は簡明さと詳細さのバランスがよく取れており、字句の釈義は少なく、ほとんどが関連資料の提供、本文内容上の補正、必要な限りでの批判的コメントなどから成っている。そして、もともと短い皮錫瑞『経学歴史』本文の叙述が綱要の役を果たすのと相俟ち、一書全体の価値を高めている。朱維錚は、この注釈のおかげで『経学歴史』が経学活動の産物から歴史研究の書に成ったことを述べ、「にわかには歴史の名著になった」と高く評価しているが、決して過ぎてはいない。

#### 注

- (1) 湖南思賢書局より刊行されたのは、1906年(光緒丙午)である。著述されたのも、それからほど遠からぬ頃と見るのが、一番自然である。
- (2) 関口順「経書観形成過程の一考察(序説)」『山下

龍二教授退官記念中国学論集』研文社 1990年  
中文訳：「経書観形成過程の一考察」

(王迪 訳) 林慶彰等主編『経典的形成、流伝與詮  
釈』第一冊に所収 台湾学生書局 2007年

- (3) 江藩『国朝漢学師承記』1818年(嘉慶23年)刊  
「漢学」とは「宋学」に対する語である。清初から嘉慶までの57人の学者を取り上げている。〔これは題記として挙げられている数。わずかな言及でも一応立伝していると見なしている人物を数えると総数は105人。常州学派は劉逢禄のみ。〕従来は周予同の選注本が唯一の頼りだったが、最近は近藤光男、漆永祥の現代語訳や注釈がある。
  - A 周予同『漢学師承記』民国23年(1934)上海商務印書館学生国学叢書〔香港のリプリント本が出回っていた。これは選注なので、立伝人数で言えば2割以下、分量で言えば原書の6割くらいの文章に注を施している。〕
  - B 近藤光男『国朝漢学師承記』上・中・下 2001.7 明治書院 〔原文、訓読、翻訳、注、年表、索引からなる。著者のライフワークというべき精密な書である。著者自身「かくて本書を読んでいただけるならば、経学の研究について必須の基礎知識が整うこととなったはずである。またこれは漢学とか宋学とかの枠を超え、さらには清朝考証学といった限界をも捨棄して、およそ中国古典を精読しようとする人々にとって、この書を必須の手引き書たらしめ得たことでもであると信ずる。』と述べている。〕
  - C 漆永祥『漢学師承記箋釈』上・下 2006.2 上海古籍出版社 〔「資料の探索は今後これ以上出来ないだろう」と自ら述べている。また、「あとがき」は異色のものである。〕
- (4) 『経学歴史』周予同注釈本の特質とテキスト問題については、後述の付録部分を見ていただきたい。
- (5) 周予同は『経今古文学』1926〔後述の『周予同経学史論著選集』に収録〕において、「自分個人はやや今文学派に傾いている」24頁と、1925、6年当時の自己の立場を明らかにしている。また『経今古文学』重印後記 1955〔同じく『周予同経学史論著選集』に収録〕では、当時の文史学界を四つ〔「否定」の史学派、凡庸守旧派、古文派、今文派〕に分類した上で、「今文派の方が新しい事物を容易に受け入れた」644頁と、当時の自己の取った立場を説明している。
- (6) 狩野直喜『中国哲学史』岩波書店 1953年  
『中国哲学史』は狩野直喜が京都帝国大学において明治39年(1906)から大正13年(1924)まで



の期間に講義した「支那哲学史」の講義録を纏めた本である。

- (7) 狩野直喜以外の「古文学」認識を、辞典類に徴してみると：

A 『中国思想文化事典』〔東大出版会 溝口・丸山・池田編 2001.7〕

368頁「今文・古文」の項目

「…ところで今文学派の一経専門、家学・師承の尊重による硬直化、また讖緯説をも許容する傾向にあった経書研究に打ちかつために鄭玄らが確立した古文学の方法論は、清代の考拠学において再現される。すなわち、経今古文に対する総合的な本文批判と分析、古代の文物制度や文字訓詁に依拠する文献学的手法を、考拠学はまさに宋明理学の観念論を克服するために自らの方法理念とした。いわば古文学への復古である。…」

B 『哲学大辞典・中国哲学史巻』〔上海辞書出版社 『哲学大辞典・中国哲学史巻』編集委員会編 1985.12〕

177頁「古文経学」の項目

「…明清之際顧炎武提出“舍经学无理学”的命题，偏重经籍研究，復興古文经学。乾嘉時期成爲“乾嘉学派”。」

577頁「乾嘉学派」の項目

「…因為他們主要以漢儒經注爲宗，推崇東漢許慎、鄭玄之學，所以也有稱之爲漢学派或清代古文經学派的。…」

- (8) 「劉礼部遺書序」は『魏源集』〔中華書局〕に収められている。「兩漢經師今古文家法攷叙」にも同じ文章が見える。ここで魏源は、「西京十四博士今文の学」は「七十子の微言大義」を継承するもので、その致用の学风は後漢には見られない。しかるに今の世で学問を語れば、必ず「東漢の学は西漢に勝り、東漢許慎・鄭玄の学は六経を総べている」と言う。清が興ってから二百年、通儒は「東京之学」に全力を傾注していた。これは今文学の立場からは是正しなくてはならない——という趣旨の意見を述べている。致用を重視するのは、『聖武記』『海国図志』『皇朝經世文編』（賀長齡の名になっているが実質は魏源）を作った魏源ならではの発想である。

また、劉師培は「漢代古文学辨証」〔原『国粹学报』24期～30期 1907～1908 『劉師培史学論著選集』（上海古籍出版社 2006年）に所収〕において、宋翔鳳の「擬太常博士答劉歆書」「漢学今文古文考」、魏源の「兩漢經師今古文家法考」の所説に、古文派の立場から反駁を加え、彼らの「今

文」「古文」に関する議論が成り立たないことを論証している。この劉師培の論述からも、宋翔鳳や魏源のころから、「今文」「古文」が「學術特色を示す語」や「学問の時代的特色を示す語」として登場したことが、間接的に伺える。

- (9) 王国維『觀堂集林』卷七 「漢書所謂古文説」

(10) 上掲注(8)「漢代古文学辨証」の四「辨明今古文立説多同非分兩派」において、劉師培は「漢儒は、今古の二学に分かれ、氷炭相容れないという状態ではなかった」と主張している。また、拙論とは少し観点が異なるが、『五經異義』において複数の古文経説と今文経説が対立している条の内、許慎が古文と今文両者一緒に賛成している例を9条挙げている〔たとえば、魯詩説と古文尚書説と春秋公羊御史大夫貢禹説の内、古文尚書説と公羊説に軍配を挙げ、魯詩説を退けている条など〕。

- (11) 注(10)で見たように、劉師培の論文では、この図式を突き崩すことに繋がる疑義が提出されている。

- (12) 『周予同経学史論著選集』の「編者説明」などによる。

- (13) データとして周予同注釈本『経学歴史』の書誌を一覧にしておく。

①上海 商務印書館 経学歴史（学生国学叢書）  
\*最初の出版と思われるもの。

目次2，序言24，凡例2，本文364

1929年3月初版（この本は存在を確認している。）

②上海 商務印書館 経学歴史（万有文庫）3冊  
\*①に「訂正及補遺」が附され万有文庫の一部となったもの。

(一) 1-2,1-24,1-2,1-90, (二) 91-220

(三) 221-364,1-15

1929年10月初版

③上海 商務印書館 経学歴史（学生国学叢書）  
\*①に「訂正及補遺」が附されたもの。

目次2，序言24，凡例2，本文364，訂正及補遺15

1928年11月初版（初版本は未見。1934年4月国難後第1版の本が多い。）

④北京 中華書局 経学歴史

\*学生国学叢書版の「訂正及補遺」に従って序言と本文を改訂し新たに活字に組み、さらに附録一、二をつけ、最後に重印後記を書いたもの。

目次(1-2)，序言(1-16)，凡例(17-18)、本文(19-349)、附録一 皮鹿門先生伝略(350-352)

皮鹿門先生著述総目(353-356)、附録二 本書引

用清代人名出処表（357-362）、重印後記（363-364）

1959年12月第1版→1981年12月第1版第3次印刷

⑤北京 中華書局 經学歴史（中華學術精品）

\*1959年北京中華書局本を、内容はそのままに、簡体字横組みにしたもの。

1, 13, 2, 265

2004年7月新1版

⑥香港 中華書局 經学歴史

\*1959年北京中華書局本から重印後記を省いたもの。

2, 362

1961年1月初版、1973年重印

⑦台北 藝文印書館 經学歴史 附注釈（増注經学歴史）

\*1959年北京中華書局本から目次、序言、附録二、重印後記を省き、新たな目次と頁を附したもの。

1, 338

1966年9月1版

⑧台北 藝文印書館 増注經学歴史

\*内容は1966年版と同じだが、新たに活字を組み直したもの（だから、頁数が違う）。

2, 394

1974年5月初版→

⑨台北 学海出版社 經学歴史（經学叢書初編の一）

\*皮名振「皮鹿門年譜」から採った画像と皮鹿門先生伝略、周予同先生伝略を掲げた後、学生国学叢書版の目次・序言・凡例・本文を影印し、1959年版の「皮鹿門先生著述総目」を組み直して末尾に附録としたもの（要するに、序言と本文は訂正されていないまま）。

0, 0, 0, 2, 24, 2, 369（364+5）

1985年9月初版

- (14) 万有文庫とは、各地の公共図書館の蔵書を充実させるため、商務印書館の王雲五（1888-1979）が経済面を考慮して企画した一大叢書である。十進分類を基にした中外図書統一分類法により、あらゆる分野の図書を網羅し、既発行の諸々の叢書の中から重要著作を精選して収録した。第1集（全1,000種、2,000冊）が1929年に、第2集（700種、2,000冊）が1934年に出ている。第3集以降は日中戦争の激化により実現しなかったという。詳しくは、湯野基生「中国の図書館のための叢書——万有文庫」アジア情報室通報 第7巻第1号 [http://mavi.ndl.go.jp/asia/entry/bulletin7-1-1.php]

をご覧いただきたい。